

7 建築家の苦楽

7.1 建築家の苦しみ、ネガティブな闘い

アメリカでビジネスをしていると、避けて通れない問題がある。それは訴訟問題であり、弁護士との関わりあいである。彼等は平均1時間300ドル（3万円位）の費用を要求する。この金は、訴訟に勝っても負けても、弁護士に支払わなければならない。全体の費用は、莫大な金額になることがある。それだから、多くの人は出来るだけ彼等と関わらないようにしようとする。問題が起きた場合は、できるだけ弁護士を使わず示談の方向で話を進めようとする。建築家の闘いは、人の住む所、働く所の「もの」をいかによく創るか、というクリエイティブな闘いである。弁護士の闘いは相手をいかにたたきのめし、自分のクライアントをいかに正当化するか、という、ネガティブな闘いである。私達、建築家の仲間では、出来るなら弁護士の家は設計するな、という言葉がある。悪くすると、訴訟問題にもなりかねないからである。

ある時、私の親友の一人であった、アメリカ人の女性のインテリアデザイナーが、自分の家を建てようとして自分で設計していた。ビバリーヒルズの隣の街のブレントウッズの崖っぷちの敷地で、設計は難しく、なかなかうまく設計できなかった。彼女は手に余って、私の事務所に設計を依頼してきた。彼女のハズバンドは弁護士であった。設計のクライアントとしては最悪のケースである。彼女の案ではとても崖っぷちには建てる事が出来ず、私は彼女の案を捨てて、設計全部を最初からやり直すことの認可を彼等から得た。そして、一つ一つのスペースや詳細をつめて実施設計図も完成し、市から建築許可を得て、工事が始まった。設計変更が沢山出たが、その変更の費も含めて契約全額の最後の金もいろいろな理由をつけて、支払ってもらえなかったのである。工事中のコーディネーションはワイフがしたとか、工事費が予想したより高くなったとかで弁護士のハズバンドが設計費の全額は支払わないと主張した。コントラクターにも似たようなことを言って全額支払わなかったと言う。設計変更費はもらうつもりはなかったが、設計費を安くしてあげた上、契約した金額も全額支払ってもらえなかったのは嫌な気持ちであった。辛かったことは、感情的にもつれて親友を失ったことであった。



崖っぷちに建つホワイトハウス、ブレントウッズの家
設計1991年



3階が通りと同じレベルなので、そこが玄関となり、階段でリビングルームに降る。

ブレントウッズは芸能人が多く住む住宅地で、夜遅くまでライトがついている家が多い。



相関体の家
幾何学的な、いろいろな形
が機能に合わせて平面図
が出来上がっている。
設計1993年

次にビバリー
ヒルズに設計し
た、日本人の弁
護士の家も同様
であった。日本
人だから大丈夫

だろうと思っていたが、結果は同じであった。彼等には、設計してもらったなどという、感謝の気持ちはなく、相手を褒めることは、自分の負けを意味するかのようであった。金を全額払うことは、彼等には敗北を意味する様に思えた。

私はすべての弁護士が、そんなふうだとは思ってはいないが、できれば、弁護士とは関わりあわない様にしようと思っていた。しかし、そう思っていたことが悪い結果になったことがある。

ある知人から、ロサンゼルス近郊の街で、大きな日本食レストランを営んでいる日本人クライアントを紹介された。彼は、東京で小売業を営み、富士五湖の近くに別荘を開発していた。

私が依頼を受けた仕事は、サンディエゴ近郊の住宅開発で、集合住宅、タウンハウス、マンション、アパート、個人住宅等を設計し、市の建築課から認可を得ることであった。私は2年程かかり設計をし、市の開発局の建築課と交渉を何度も何度も重ねて、公聴会もあり、開発の認可を得た。

サンディエゴの土地や住宅販売の宣伝の為、ロサンゼルス近郊のオーナーの隣接地に、新しいスタイルのモデルハウスを私が設計して建てられた。このモデルハウスに多くのクライアントになる様な人達が招かれ、盛大なパーティーが催された。

このモデルハウスは、たいへんユニークな現代住宅のデザインで、好評であった。相関体の空間構成になっていて、今までにない様な住宅空間を創り出していた。幾何学的にも完璧で、繊細な建築であった。私としては力を入れて設計した作品である。私にとってもドリームハウスであった。

この住宅が完成した頃、日本のバブルがはじけた。日本から、税金のがれで送られてきていた金も、送られてこなくなった。又、期待していた日本人のクライアントからの投資はなくなった。その上、オーナーの経営するレストランの売り上げも下がる一方になった。サンディエゴの住宅開発地も、切り売りをする様な状態になっていた。

そこに、問題が起きた。モデルハウスの屋根からの雨漏りが見つげられた。よく見ないと分らないのだが、雨漏りは壁を伝わり、多少床材にデコボコが見られる様になった。

相関体の家、
表通りが激しい交通だったので開口部を
小さくし、玄関の右側は3台分の車庫。





相関体の家、バックヤードからのビュー。
いろいろ幾何学的な形の空間が連結し外部にもその形が出てきている。

オーナーは大騒ぎを始めた。雨漏りに関係ないことまで列挙し、難癖をつけ、訴訟するとはのめかした。

“売る為に建てた家だから、完璧に直してくれ”と彼は言った。“直すまでは、銀行から借りている金の利息を支払ってくれ。すべて建築家に任せてあったのだから、全責任をとってくれ”とい

うのである。

実際には、彼の子供の若夫婦達が住んでいて、売る予定はないのだったが。

いろいろ話をしたが、まったく受け入れない。彼は自分の不動産投資への損失を取り返そうとしている様であった。

“もし、この要求を受け入れなければ、訴訟を起こし、二度とアメリカで働けない様にしてやる”と彼は私を脅した。この工事を施工したコントラクター（請負業者は日系人）で、いい仕事をしてきた業者である。私の作品を沢山施工してきた、信頼できる人であった。しかし、設計が複雑なこともあって、コントラクターが直そうとしても、簡単になおせるものではなかった。工事の途中での無理な設計変更要求、予算の切り詰め等を考えれば、施工者の責任だ、と一方向的に責めたてることは出来ない。オーナーの要求は、無理な、道理の外れた要求であることは分っていた。コントラクターは弁護士をたてて闘おう、と言った。しかし、私は裁判を起こしたくなかった。裁判に勝っても負けても、弁護士には多額に費用を支払わなければならない。しかも、裁判は長くかかるだろう。そして、その間、ずっと苦痛を味わなければならない。

彼の要求する金額は大金であった。私はその金額の半分を支払うので、彼の要求に応じようとコントラクターに言った。アメリカでは、建築家がこの様な賠償金を支払うことはないのであるが、何ヶ月かに分けて、その金額を私とコントラクターはオーナーに支払った。

しかし、それで終わったわけではなかった。すべての金を支払い終えた時、彼はまた理不尽な要求を突きつけてきた。

“この家は、どうしても売れない。これは設計が悪いからだ。もう2つの寝室を増築する設計をして、建築工事に要する費用の全てを支払ってくれ”と、まったく常識はずれた要求だった。“金を出さなければ、アメリカにいられないようにしてやる”と、またしても脅しをかけてきた。私が一度、この傲慢なオーナーの



相関体の家、円形のリビングルームに他の空間が幾何学的な形で入り込んできている。



**関連体の家
舟形のダイニングテー
ブルに併せてダイニングル
ームが出来上がった。**

**関連体の家
リビングルームのファイ
アープレースと階段**

理不尽な要求を受け入れてしまったので、彼はもっと脅し取れると思ったのだろう。このオーナーは、以前にも他の人から金を脅し取ったり、支払うべき金を支払わなかったりしていたらしい。この話を聴いて、私は恐怖した。彼はプロなの



だ。只者ではないのだ。私はもう闘うしかないと思った。

信頼出来るデベロッパーから、ユダヤ系のアメリカ人の弁護士を紹介してもらった。私は、紹介してもらった弁護士のミスター・シンガーに、今までの経過を詳しく書いて、手紙を送った。それにアポイントメントをとって、彼に会いに行った。彼は言った、“どうしてもっと早く弁護士に相談しなかったのだ”。私は率直に応えた、“私は、弁護士に良い印象を持っていなかったのです”。彼は言った、“あなたが考えている程、弁護士は悪くはないし、費用もそんなに高くもない。安心しなさい。私は、あなたを正当化してみせる。そして、今まであなたが、不法に支払わされていた金を取り戻してみせる”。私は弁護士に私の気持ちを、“今迄に私が支払ってしまった金を、取り戻さなくてもいいです。今後、再び脅しをかけられるようなことがなく、金を吸い取られる様なことがなくなれば、それでいいのです。私は、建築に専念できるようになれば、それでいいのです。”と話した。ミスター・シンガーは、オーナーに手紙を送りつけた。「以後、今までの様な不法な脅しをかけると、あなたに対して訴訟を起こし、そして、今まで不法に脅し取っていた金を取り戻す」と、いう様な手紙だった。その手紙を送った後は、その会社から2度と脅される様なことはなくなった。そして、2、3年後、私を脅していた会社の社長が、癌で亡くなった。葬儀の通知の手紙がきたが私は出席しなかった。

この事件を経験して、私は強くなった。弁護士に対する偏見も少なくなった。何年か後に、再びこの弁護士ミスター・シンガーにお世話になることになった。

ハリウッドの中心地に、アカデミー賞のショーをするエンターテインメントセンターが出来上がった。その建物中に、私は現代的な日本食レストランを設計した。そのアメリカのデベロッパーから気に入られて、中国系アメリカ人のレストランのオーナーを紹介された。そのオーナーから、チャイニーズ・レストランの設計の依頼があった。最初から、契約変更、設計費の値切り、設計期間の短縮、等々いろいろ問題が多かった。

とにかく開店予定まで時間がないから、急いで設計を進めてくれという。何度もミーティングをし、ファックスでプランを送って、いろいろなことを確認して設計を進めた。しかし、契約した頭金の支払いはなかった。設計費を催促するのは好きでなかったが、せざるをえなかった。頭金は、さらに1ヶ月以上遅れて届いた。しかし、小切手は不渡りだった。基本設計が終わって、やっと頭金、設計費の10%を現金書留で送ってきた。基本設計費はすぐに支払うから、至急に工事用の図面を描いて、完成させてくれという。その図面を進めていく間にも、ミーティングは何度もした。しかし、基本設計費の支払いはなかった。一方的に、急いで図面を完成させることだけを要求してきた。

ある時、そのことで、ミーティングをすることになっていたが、突然キャンセルになった。その後、何の音沙汰もなくなった。電話をしても繋がらない。もし、設計費の支払いがなければ、設計を止めるしかないという手紙を彼あてに送った。今までも設計費をもらえなかったプロジェクトはたくさんある。またそんなことにならない様にと私は念じた。新しく建てられたハリウッドの複合建築物には、期待していた程の客やツーリストが来ず、多くのテナントは不振の様であった。このビルの中でレストランを開業することを、チャイニーズのオーナーはためらい始めたらしい。彼は大きなペナルティーのあるリース契約を、なんとかペナルティーを払わずに破棄しようとしているのではないかという話を私は聞いた。1ヶ月半程して、チャイニーズのオーナーの弁護士から、手紙がとどいた。

「建築家が設計をやめたことによって、工事が始められなくなった。地主から大きなペナルティーを要求されて、大きな損害を受けた。開店が出来ないことによる、3億ドルの損失を要求する」という手紙であった。私は“どうして？”という驚きと多少の恐怖を感じた。何か毒蛇に狙われている気持ちになった。いろいろ考えた末に、私はまたミスター・シンガーに相談することにした。このプロジェクトの経過報告の手紙をそえて彼にアポイントメントをとった。ミスター・シンガーは言った。“これは「最良の防御は最良の攻撃である」といって、よく弁護士がつかう汚い手である。自分が訴えられる前に、おどしに

ハリウッドエンターテインメントセンター、遠くの丘にハリウッドのサインが見える。この4階にあのチャイニーズレストランが出来るはずだった。

うって出る手なのだ。”ミスター・シンガーは、その弁護士の学歴や経歴を調べた。“あまりよくない弁護士だ”と彼は言った。“しかし、心配しないでいい、必ず正当化して勝ってみせる”それで、“どうするか？”と彼は私に聞いた。私は答えた。“私は仕事をした分の設計費を支払ってもらえれば、それでいい”ミスター・シ



ンガーは言った。“普通は、弁護士費用も時間的な経費も相手方に要求するのだが…、ミスター・イノウエは欲がないなあ”と言った。

私は米国建築学会の会員なので、その学会の契約書を使って契約している。だから、裁判所には行かず、「仲裁所」で解決する。これは建築家にとって、時間と金を節約する為である。それでも「仲裁所」にいくまで、約1年近くかかった。小さい裁判所のような「仲裁所」へ行き、仲裁があった。私は勝つ自信はあったが、やはり心配であった。相手は二人の弁護士を連れてきていた。私は審問台に立たされた。私は相手方の弁護士から厳しい質問責めにあった。主に、建築に関する法と契約に関することであった。私は自分の感情を抑えて、冷静に、的確に答えた。私は思った。「しかし、それにしても、ウソを正当化しようとする、こんな弁護士が、どうしているのだろうか？ よくこんなウソが言えるものだ」と、またしても、弁護士に対する不信感を抱いた。1ヶ月して審判が下った。私の全面勝訴であった。私が設計した分を、相手側は支払わなければいけない、ということになった。そして、お互いに再度訴訟は出来ない、という判決であった。しかし、私が勝ったからといって金をもらえるかというと、これはまた別問題であった。相手は全然支払う意志がないのだった。ミスター・シンガーは、上級裁判所に提訴する手続きをとった。

上級裁判所でも、私は全面勝訴した。しかし、彼の持っているレストランや不動産は、別の人の名義になっていた。彼は支払う能力がない、ということであった。

“彼はプロだ”とミスター・シンガーは言った。“おそらく前にも同じ様なことをしているのだろう”このオーナーは、アメリカで20年もチャイニーズレストランのビジネスを展開している、この道のプロであった。彼は人を脅して、金を騙し取る。そして、自分の金は決して払おうとしない。こういう人間もいるのだ。行くところまで行ったが、これ以上進めない。大変長い時間と、苦痛と、弁護士代を費やした。私は、またしてもプロとしての経験の為の、高い授業料を支払ったのだった。